

ふれあい情報

2022年5月26日(木) 第344号

■発行 日本退職者連合
■発行人 野田那智子
■連絡先 〒101-0062
東京都千代田区神田駿河台3-2-11

<TEL>03-5295-0507 <FAX> 03-5295-0541 <e-mail> ntr@sv.rengo-net.or.jp

2年ぶりに全国事務局長会議を開催しました

5月19日(木) 東京グリーンパレス



5月19日、退職者連合はコロナ禍のため延期となっていた全国事務局長会議を2年ぶりに開催しました。

当日は、来賓として泉立憲民主党代表、玉木国民民主党代表をお迎えし、「30周年記念企画 次の世代に継承すべき社会とは」というタイトルで早川副事務局長を講師に学習会を行いました。また、22年度の政策制度要求や組織拡大の取り組みについて意見交換を行いました。

人見会長
あいさつ

久しぶりに、集まって交流できる会になりました



全国の仲間がこのように集まって、意見交換・交流する場は本当

に久しぶりです。コロナは高止まりという感じですが、各組織も徐々に活動を再開しており、制度政策要求などにも取り組まれています。同時に、感染防止も引き続き取り組んでいく必要があります。ロシアによるウクライナへの軍事侵攻から3か月になります。依然として悲惨な状況が報道されています。各組織でも戦争反対に取り組まれていると思いますが、私たちが求めるのは一日も早い停戦です。ロシアに対して侵攻をやめろと言いつつ続けていきたいと思えます。核兵器の使用も危惧されています。核兵器禁止条約を日本が早く批准するよう、取り組みを進める必要があります。

7月10日に参院選が予定

されています。その後3年間国政選挙がないことを考えれば、日本の行く末を決める重要な選挙です。連合推薦の9人の組織内候補、地方44人の推薦候補の必勝を期していきたく思います。全国の皆さんのご支援をお願いいたします。

来賓あいさつ

泉健太 立憲民主党代表



権力者に都合の良い世の中ではなく、普通に暮らす国民の自由や権利

を守りたい。「物価高と戦う」「教育の無償化」、核共有や先制攻撃能力ではない「着実な安全保障」を実現します。

玉木雄一郎 国民民主党代表



一番大事なものは、給料が上がる経済を取り戻すこと

です。現役の給料が上がらないと年金も増えません。頑張れば報われる社会を実現したいと思えます。

30周年記念企画

次の世代に継承すべき社会とは

早川行雄副事務局長



近日中に報告書をお送りします。ご活用ください。

昨年から組織内に「次世代継承委員会」を設置し、目指すべき社会のビジョンについて議論を進めてきました。表題に掲げた「誰もが自分の生き方を自由に選択できる社会」というのは、連合結成以来歌われている「幸福さがし」に通じています。この報告は、「自由で民主的な共生社会」「差別も不条理もない平等社会」「平和で幸福な安心社会」「自然と共生した安定社会」の4本柱で構成されており、それぞれが憲法の自由権、生存権に対応しています。4つの窓からあべき社会を覗いている訳ですが、それを天井から見れば、幸福追求が保障された社会だということになります。

「政策制度要求」「組織強化・拡大」について討議



野田事務局長

会議の後半では、野田事務局長が21年度の自治体要請の実施状況、ジェンダー平等の実現状況について報告しました。コロナ禍の困難な状況下において、昨年度は411の自治体で要請が行われています。

川端常任幹事からは、「次世代委員会の理念を具体化するのが、政策制度要求として、応能負担のあり方、被保険者の拡大、ふるさと納税などを中心に、政策制度要求について説明がありました。

また、草野副事務局長からは、組織強化・拡大方針、HPのリニューアルについて提起がありました。

その後の質疑では、「家族介護への支援策」「積極財政が重要」「組織拡大への現役との関与」「個人加盟や連合非加盟組織」などについて活発な意見交換が行われました。



川端常任幹事



草野副事務局長

復帰50年を祝えるのか (2)

沖縄県退職者連合会長 波平 剛

今回は、平和憲法の下へ復帰すれば基本的な人権が守られ、自治権が保障されると勝手に思い込んで復帰運動に没入していたこと。そして、復帰で夢から目覚めて国内全体を見渡して来た50年、というように恥ずかしいことを書きました。

沖縄では住民の犠牲者があまりにも多かった

今回は、運動の中でもあまり語られていない、復帰運動を高揚させた背景を書き残しておきたいと思えます。それは、沖縄では戦時中も戦後も、住民が犠牲者になることがあまりにも多かったという事です。



例えば、伊江島の戦闘があります。ここでは、アメリカの従軍記者アーニー・パイルが戦死しています。東洋一と言われた日本軍の伊江島飛行

場をめぐる激戦は、県内でもあまり知られていません。

この戦闘では、小さな島で3千もの住民が日本軍に協力させられました。当時の皇民化教育を背景に、多くの住民が伊江島防衛隊や伊江島少年義勇隊として日本軍に組み込まれ、米軍と対決させられたのです。

戦後は土地を奪われ、人の命もまた奪われた

伊江島では、戦後、さらに農地を米軍基地拡張で取り上げられています。加えて次のような悲劇もありました。

戦後処理の不発弾を積み込んでいた米軍の輸送船が爆発事故を起こし、近くで下船中だった100人余りの住民が犠牲になったのです。

戦争の犠牲になり、戦後は土地を奪われ、戦後処理のさ中にまたしても命を奪われた伊江島の犠牲は、沖縄の縮図とも言えます。農地を奪われたのは、伊江

島の住民だけではありません。現在の宜野湾市伊佐浜でも、住民を強制的に立ち退かせて基地を拡張しています。民主国家を標榜するアメリカが一方的に土地を取り上げる。このような理不尽さを絶対に許すことはできないし、忘れてはならないことだと思います。

土地を奪われた住民は、無理やりブラジルへ移住させられたりもしています。陰では、これは移民ではなく、棄民だとささやかれています。自国民を捨てるなんて残酷なことがアメリカの支配下でまかり通ったのです。

米軍は、土地だけでなく、住民の命まで奪っています。石川市で起きたジェット戦闘機墜落事件では、宮森小学校や民家を焼失させ児童11人を含めて20人近くが死亡、200人余りが負傷しています。(1959年)

那覇市の中学生1年生が、学校帰りに青信号の横断歩道を歩行中に海兵隊員運転の大型トラックに轢き殺されるという事件もありました。被告は米軍の軍法会議に

かけられましたが無罪放免になりました。(1963年)このような事件は、他にも数多くあります。これが、日本国憲法施行から15年も経過した時代の沖縄の姿でした。

沖縄は、米軍基地のない平和で豊かな発展を望んでいた それは今も変わらない

このような復帰前の状況を見れば、当時の沖縄が米軍基地のない平和で豊かな発展を望むのは当然ではありませんか。そして、それは今も変わらないのです。住民の心豊かな暮らしを保証するのが政府や政治の役割だと思ふのです。

4月下旬から5月にかけて、4月28日の屈辱の日(サンフランシスコ講和条約発効の日)、5月3日憲法記念日、5月15日復帰記念日と続きます。梅雨時とも重なり憂鬱な時節と感ずるのは、一人私だけでしょうか。

前回から続く。復帰50周年を機に波平会長に寄稿をお願いしました。退職者連合事務局